

昔のくらしあれこれ

羽 柴

弘

(会員・佐伯市龍護寺)

(一) いもといわしと

浦前うらまへんしに限らず、江戸時代から明治大正にかけて、佐伯の人々は、いもといわしと麦飯を常食としていた。

ところがそのいもを作り、麦を作っていた段々島は、海岸から山上まで今もその面影をそのまま残しているが、耕地としては荒れ放題、僅かに屋敷近くに菜園を作っているだけである。無理はない。猪いのししがあばれて荒らすからで、このことは山村地帯でも全く同じこと、祖父達が営々と開墾した山田は、殆んど杉林になっている。

いもは、江戸時代から明治・大正・昭和にかけて、当地方は立地事情に恵まれたまま、人々の食生活の大半を支えていた。戦中・戦後の食糧窮乏の当時、どのような重宝がられたか。五十才以上の老人達は身をもって体験

している。しかしその後の繁栄の中で、今は作っても食いてが無く、子供たちも好まない。変れば変ったもので、「佐伯のいも食らい」と、大分や県北の友達から冷やかされたことは、今は全くの昔話になってしまった。

麦飯に至っては、近頃はみんな口が肥えて、昔ながらの麦飯を常食にしている家は一軒もあるまい。近ごろ水田の裏作や休耕田に麦を作っているが、それはビール用の麦である。

食卓のまん中に、山のようにむいたいもいもと、そえられたいわしの丸干、今思うだけでも食欲がわく。皆もりもりと食べて、その押さえが麦飯であった。しかしこの食生活の体験をもっているのは、五十歳以上の老人達である。民俗史の立場から、高令の方々に今のうちに聞書きでもとっておきたいものである。

(一) 因尾という里

皆さんは、「因尾の振り米」という話をご存知であらう。因尾というところは、田舎も田舎の山家で、粟あわや稗ひえを常食としていた。そこで病人が危篤に陥った時、誰かの家から竹ん筒に入れた僅かばかりの米を持参、ガラガラ振って聞かせたという。その貧窮の里が因尾だということである。まことに迷惑な話、もつての外のことで、因尾の名譽のために、敢えて反駁はんぱくせざるを得ない。

古代史をせんさくするまでもないが、大陸から米作がわが国に渡米したのは、弥生時代から古墳時代にかけてのことであるといわれて、凡そ今から二千年程前のことである。当地に種粳や耕作の技術が導入されたとき、真先に耕作を取り入れたのは、私は因尾の山里ではなかったかと思っている。それは大野川流域の古代文化が、野津や三重のあたりから峠を越して、文化交流が盛んであった因尾の、山部やまがの高地や谷々にはいったようである。海拔四〇〇〇ほどの高地、元山部もとやまがを例にとると、今は数戸しかない山里であるが、昔は峠越し尾根伝いに経済や文化の交流が盛んであった。高原状の四周には湿地が

多く、くぼ地や谷々も到る処にあって、水田化は容易で谷川や湧き水を引いて鍬を入るれば、粳種のばら播はいとも簡単に出来る。二三度草取りをし、出穂後鳥獣を防ぎさえすれば、やがて垂り穂を刈取ることが出来る。このことは敢えて山部に限らず、上津川・井ノ内、井ノ上でも、谷川を少しせき止めればその水は、すぐ兩岸の低地をうるおして米が作れる。

番匠川の中流や下流を堰せき止めての井路の開発は、江戸時代になってのこと、その先駆けを承わり、稲作の開創期を長く働きつづけたのは、私は因尾の山里であると確信している。もし佐伯地方に「振り米」の事実があったとすれば、それは麦も作れないような海岸地帯ではなかったか。実地踏査から私はそう推論している。

(二) 因尾浄瑠璃

ことのついでに、「因尾浄瑠璃じょうるり」もとり上げよう。旧版佐伯史談第一一九号に、本匠村井ノ上の久々宮永会員が寄せられた、「里ことば豊後浄瑠璃―渡辺綱羅城門鬼退治」のあれである。この平安時代末期、源頼光四天王の一人渡辺綱が、鬼オニ（実は盗賊）が棲すんでいた羅生門に

出かけ、これを見事退治した物語、それを観世小次郎が謡曲に作り、能舞台によって天下に知られたのであった。

それが江戸時代に大いにもてはやされ、いつの頃から戯作者が俗語や方言をふんだんに連ね、何か祝宴の座興に口琵琶の弾き語りや演じ、満座からやんやの喝采を博したものである。(消夏の一策、この際久々宮氏の寄稿されたものをご覧いただきたい)

さて、私をはじめこれを耳にしたのは少年の日で、「因尾浄瑠璃」という題目であった。数年後大分で聞いたのも「因尾」であったので、よほど巧妙な文学教養をもった人があったと思っていたが、どうも「豊後浄瑠璃」が世上流布では本物のようで、「因尾」の方はやはり前項の「振り米」と同様、因尾が山里なるが故のぬれぎぬを着せられたことになる。

愚案するに、「豊後浄瑠璃」は江戸の戯作者の手によるもの、江戸市井の大衆に歓迎され、たまたま当時売出しの浄瑠璃の一派、豊後節としてもはやされた、宮古路豊後様の軽妙な語り口を模したものはあるまいか。

そこではじめて「豊後浄瑠璃」の名前が生まれ、何年も経たぬうちに三勤交代の江戸みやげとなって、全国に

流布したと見たい。だから「因尾」は、佐伯言葉の方言や訛言(なまり)を巧者な人が口から出まかせ、因尾の名前をつけただけであると断じたい。だが私の誤解・独断の点、訂正ご教示が頂けたら幸いである。

四 水銀 鉱 跡

明治二十六年(一八九三)、佐伯の鶴谷学館の教師国木田独歩は、数人の友人生徒と共に柵牟礼の古城址に登り、その帰途脇部落の裏山の洞穴を、松明をとぼして探検している。その詳細ははっきりしないが、どうも水銀鉱山の廃坑のようである。

終戦直後、鶴岡小学校の教頭をしていた私は、進駐軍の指令によって、中隊教練用の指揮刀の廃棄をすることになった。番匠川の深い淵に沈めても、光ってすぐ見つけかりそう、焼いても、土中に埋めても駄目だと思ひ、ふと妙案が浮かんだ。それは奉安殿の裏手に当る、広瀬家の裏山の洞穴を知っていたので、こっそりその洞穴の奥底深くほうりこんで始末した。もう地中の湿気や、くえ落ちた土砂にさび果てているだろう。今から三十六年ほど前の話だが、この洞穴も江戸時代に水銀を採掘した跡

に相違ない。

昭和四十二年一月、史談会は城山の裏手に、落城に備えての抜け穴があるという風評に応じ、十人ばかりが案内の人を雇うて出かけた。市宮火葬場の西上方、樹林の中にポツカリ開口していた。ロープによって入洞したがかなり大きな洞穴で、大量のズリが一ばいで、斜め下に掘られている。結局抜け穴でなくて、水銀を掘った跡であらうと評議は一決した。

以上のような洞穴は、坂ノ浦・野口の高野・白瀉・坂山・下脇・上脇いたる処にあり、番匠川を越えた稲垣の大内にも巨大な縦穴があり、水銀採鉱の跡とされている。しかし、明治以後の文献に何もないので、恐らく江戸時代に稼働したものであらう。

ここで思い出すのは、今は故人の梧桐高野喜助氏が、本誌の前身郷土史研究第十八号に寄せられた、佐伯の古い子守唄である。

おむくが父ととさん何処へ行た

豊後佐伯に鉞山掘りに

— というのであるが、恐らく当時の下野村から上岡—切畑—直見にかけての、水銀鉞掘りとそれに付帯する水銀製

錬の技術者が、方々から入りこんでいたことが考えられる。あるいはまた江戸中期明和年間の下野村桜口銀山・畑野浦尾浦金山の採掘などもあり、思いがけない山腹に廢坑を発見することがあらう。やはりこれらも郷土の歴史を物語るものである。

(五) 緒方惟栄公の墓

この程大野郡緒方町は、渡辺澄夫先生編者になる『源平の雄緒方三郎惟栄』を発行され、私はその一冊を恵贈に預った。その終章に「余話」と題して、

緒方惟栄は赦免後、豊後佐伯荘に住み、その子孫が佐伯氏となったという。云々

と「尚疑問が残るが——」といって、多くの問題点を指摘されている。私は惟栄公の佐伯在住と、その没後佐伯のどこかに葬られた—という宿題をもつに至った。

この本は既に市内の書店で販売されている。佐伯氏の元祖緒方惟栄公の理解の上に、その一冊を会員の机辺に備えなざることをおすすめする次第である。

(おわり)